

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』
第9号 (2007年2月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. 真冬のケンブリッジより
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. グローバル時代の「知識戦略」
2つの「かのように」
「知識」と「ヒト」
グローバル時代の「知行合一」
4. 編集後記

1. 真冬のケンブリッジより

合計1ヵ月半にもわたる一時帰国及びイスラエル出張を終え、ケンブリッジに到着したのが、1月14日の午後11時でした。驚いたことに真冬のケンブリッジに雪がまったくありません!! こうして、例年になく雪の無い厳寒のケンブリッジから、高い「志」を抱く若人の皆様へのメッセージをお送り致します。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

お正月を4年ぶりに日本で迎えた私は、1月2日、年始の挨拶のために妻の実家を訪れました。茶道(表千家)の教授である義母に勧められて、私は今回初めて「正客(ショウキヤク)」という大切な役割を仰せつかりました。ご存知の方も多いと思いますが、「正客」が、①挨拶のタイミング等の作法と所作、②時と場所にふさわしい会話、そして③道具、禅、歴史や芸術等に関する知識をわきまえていないと、茶席はお粗末なものになります。親切的な義母の指導に従いながらも、私はぎこちなく振る舞い、「ぐい飲み」こそしなかったものの、皆様にご披露する訳にはいかないような

不調法な茶席の張本人になり、家族だけの茶席であった幸運にホッとした次第です。伝統的な日本を多少なりとも心得ている「かのように」自惚れていた私は、こうして正月早々恥かしい思いを致しました。

時間を遡って昨年末、招待を受けて私は初めてイスラエルを訪れました。この招待話は、元東京大学教授で現在丸の内ブランドフォーラム代表の片平秀貴氏とのご縁から頂き、それは丁度イスラエル・レバノン紛争が勃発する直前の6月末でした。紛争勃発後の7月18日、イスラエル行きの返事を私が出した理由は、①「生きているうちに世界中の素敵な場所を訪れたい」という生来の好奇心と、②戦慄する「9/11」の時でさえ親切な人々に恵まれて米国から無事帰国した経験から「憎まれっ子世にはばかる」を私が自認しているからでした。とは言え、マスコミが描き出す中近東情勢は、ニューズ・ヴァリューを勘案した結果、当然のこととして「戦塵に包まれる街の光景と苦悩する人々の姿」ばかりです。従って、楽観主義者の私ですら、「もしも…」と不安がよぎったことは何度もありました。22日早朝、到着したイスラエルのホテルは、あに凶らんや、眼前に地中海が広がり、浜辺でサーフィンを、また屋外プールで水泳をする人々がいる平和な景色のなかに在りました。そして私は地中海を眺めつつ、断片的情報と不完全な知識に基づいてイスラエルの国情を理解した「かのように」思い込んでいた自らに恥じ入っておりました。勿論、同国には危険な地域は存在します。しかし、知識の不完全性故にあたかも「国全体」が危険である「かのように」思っていた自分自身に対して、私は改めて疑いの目を向けておりました。

こうして2つの「かのように」に関わる失態を体験した私は、今、1912(明治45)年1月に森鷗外が『中央公論』誌に発表した短編小説『かのように』を思い出しています。既に読まれた方も多いたと思いますが、鷗外はこの小説の中で、学問はあたかも触れたり見えたりする「かのように」思えるものを「確かなもの」として捉え、頭の中で考えることにより進歩してゆくのだと語っています。私は、ドイツの哲学者ハンス・ファイヒンガーが1911年に著した『「かのように」の哲学(Die Philosophie des als ob. System der theoretischen, praktischen und religiösen Fiktionem der Menschheit auf Grund eines idealistischen Positivismus. Mit einem Anhang über Kant und Nietzsche)』を、翌年の1月には自らの小説の中で言及するという鷗外の海外情報収集能力に驚嘆すると同時に、今、本学のワイドナー図書館とアンドーヴァー神学部図書館に所蔵される初版本の分厚い *Die Philosophie des als ob* を借りたい衝動に駆られています。

3. グローバル時代の「知識戦略」

年末年始に2つの「かのように」を経験した私は、今、グローバル時代の「知識戦略」を考え直しています。いつもの通り、結論を先取りして申し上げますと、次の通りです。我々は、現在、好むと好まざるとにかかわらず、「ヒト」、「モノ」、「カネ」そして「情報」が猛烈な勢いで世界中を駆け巡るというグローバル時代に生きている。こうした時代に溢れる情報は、目的・正確さ・タイミングという基準で有効性・重要性を改めて評価されるべきである。換言すれば、グローバル時代において、我々は或る特定の情報や知識に基づいて世界中の人々があたかもすべての面に関係を持つ「かのように」勘違いし、或いはグローバル時代であるにもかかわらず、グローバルな視点を忘れて我々がすべて理解した「かのように」思い込む危険性に曝されている。これを回避するには、我々の目的に合致

した情報収集・知識形成が要求される。こうして、グローバル時代にふさわしい情報収集・知識形成の方法を工夫した洗練してゆくこと—「知識戦略」—においては、①目的を明らかにし、必要とする情報・知識を評価・選別すること、②グローバル時代の現実世界では激しい状況変化が予想されるため、情報・知識は実際にかつ常時チェックすること(リアリティ・チェックとアップデート)、③情報・知識の評価・選別と、情報・知識が実際の或いは最新かどうかに関しては、能力が高く信頼できる情報発信相手の助力を要すること、④情報・知識が現実的かつ最新であるためには、直接的・継続的・多層的で、双方向の情報交換を必要とすること、以上4点が重要である。これが今月の話題です。

2つの「かのように」

小誌で頻繁に触れている通り、情報通信技術(ICT)の発達は目覚しく、時として恐ろしささえ感じます。大量の情報が技術的に容易にかつ経済的に安価で瞬時のうちに世界中を駆け巡るようになりました。更には航空機等交通手段の発達がグローバル化の深化を一層加速しております。こうして私達は、日常生活においてあたかも時間と空間が縮小した「かのように」感じる機会が多くなり、その結果、良かれ悪しかれ私達はグローバル時代に生きていると言えましょう。と同時に、グローバル時代であるが故に、私達は時折或る種の錯覚に陥ってしまいます。たとえば、①経済分野においては、働く者すべてが競争し合う「かのように」、②政治的・文化的な価値観や歴史観において、人々すべてが一致する「かのように」、③ICTの発達で誰もが世界中に存在する情報・知識すべてを取得できる「かのように」、④その情報・知識すべてを私達個人が認識・理解できる「かのように」、⑤縮小した時空概念の中でのグローバル化のすべてが危険である「かのように」感じてしまうのです。

慧眼な皆様には明白なことでしょうが、実

際にはそんなことはありません。反対に、①経済分野では過当競争の脅威と同時に協調という機会も増え、②政治的・文化的な価値観や歴史観については、共通するものと共に対立するものも増大し、③ICT で取得可能な情報が増大するとは言え、人間の情報収集能力・理解能力の限界故に取得不可能な情報も増大し、④人間の認識・理解能力の限界故に、認識・理解不可能な情報・知識と共に、不正確な情報、更には悪意に満ちた情報も増大し、⑤グローバル化に伴う危険性が増大する分野と同時に、危険度が低下して逆に安全性が高まる分野も生じる訳です。こう考えますと、「かのように」は、(a)学問の進歩や芸術の発展に役立つ場合もありますが、(b)学問の停滞や芸術の退廃につながる場合もあることに留意すべきでしょう。こうして私達は、今、2つの「かのように」—①良い「かのように」及び②悪い「かのように」—を見極めてゆく「智慧」を必要としております。しかも世界中の各地の状況が私達の日常生活に対して程度の差こそあれ影響を与えるようになったグローバル時代、一層複雑怪奇になった「かのように」の良否と正否を判断する能力を具える工夫—「知識戦略」—が重要になってきたと私は考えております。

「知識」と「ヒト」

冒頭で触れたイスラエル訪問では、聴衆の中に世界中でビジネスを活発に行い、現在、日本での事業拡大を計画している聡明なビジネスマンがいらっしやいました。この方は私がイスラエルを離れる日の早朝、所有するハイテク工場を私に案内しつつ、それが日本が誇るハイテク企業であるファナックの工場を模したもので、「日本の知恵」が遠く離れたイスラエルに如何に伝播したかを直接的かつ具体的に教えて下さいました。また講演会当日、最初にスピーチをして下さった在イスラエル日本大使館の鹿取克章大使は、講演会終了後、公邸でレセプションを開いて下さり、私は多くのイスラエル・ビジネスマンと一緒に美味

しいお寿司に加えて、私には懐かしく感じる肉じゃが、そしてきしめんを頂戴して、グローバル化の恩恵を初めてのイスラエルで満喫しておりました。そして、鹿取大使に御礼を申し上げると共に、私のイスラエルに対する「イメージ」が如何に脆弱な知識と誤った先入観によって形作られていたかを恥じ入りつつお伝えすると同時に、微力ながらイスラエルと日本、更には周辺アラブ諸国との交流にお役に立ちたい旨申し上げました。

こうして私は昨年末、西洋と東洋が交錯する中近東のイスラエルで、西洋哲学の教えの一つ「汝自身を知れ/グノーティ・セアウトン(γνώθι σεαυτόν or gnothi seauton/nosce te ipsum/know thyself)」を痛感しておりました。以前、*The Cambridge Gazette* の昨年4月号で、ケンブリッジを中心に様々な討論会・研究会に参加した経験を踏まえて、私が銘記する2つの訓戒を皆様にご紹介しました。すなわち、①「知ったかぶり」の恐ろしさ、そして②「自分が理解していないことを知らないこと(所謂「無知の無知」)」の恐ろしさです。①の「知ったかぶり」をする人々に対しては慧眼の皆様なら容易に見破ることが可能で、問題無いでしょう。しかし、たとえ有能な皆様でも、②の「無知の無知」に囚われた人々を相手にすると大変な苦勞を強いられると思います。私は親しい友人と次のようなことを時折語り合っています—昔は「地球は丸い」と言ったり、地動説を唱えると苦勞したが、今でも状況は大して変らない。例えば、善良かつ純情で、愛すべき人々である未開の原住民を相手に映画の『ジュラシック・パーク』や『スター・ウォーズ』を見せた後、それらの映画がフィクションだと説明するのは至難の業だろう、と。すなわち、自分が理解している「かのように」思い込んでいる人に新しい情報・知識を伝えようとしても、先入観や自惚れが障害となって知識が伝わらない危険性があります。

このことは大変重要で、その原因が「ヒト」自身の問題であるだけに、如何に ICT が発達

しようとしまいと関係ありません。約百年前の1911年に森鷗外は海外の哲学書を出版と同時に読了しておりますし、同じく約百年前の1905年、レーダー技術が存在しなかった時代に、我が帝国連合艦隊は、哨戒艦艇の綿密なる配備によってレーダー網と同様の機能を果たす哨戒網を構築し、バルチック艦隊の早期発見に成功しました。そして有名な「天気晴朗ナレドモ波高シ」の電文を打電、時を置かずして直ちに出勤します。翻って、約65年前の1941年、最新のレーダーを配備して我が帝国海軍艦上機の大編隊を探知したにもかかわらず、またその直前には哨戒中の米国海軍の駆逐艦が帝国海軍の特殊潜航艇を探知し、直ちに通報したにもかかわらず、真珠湾は眠ったまま、12月7日の朝を迎えることとなります。こうして昔も今も、情報や知識は、「ヒト」がその有効性・重要性を理解しないと容易に伝達されません。すなわち、「志」が高く、特定の目的意識を持つ「ヒト」だけが「知識」の価値を理解でき、それを求めて努力する訳です。そうした「ヒト」も、日々の努力無しでは情報や知識の価値を見抜く力は養えません。皆様、こうして「知識」がたとえ既に存在したとしても、その価値を評価できる「ヒト」が存在しなければ、「知識」は存在しないのと同然であることがお分かり頂けたと思います。従いまして、「知識」を効率的に活用する社会とは、最初に「知識」の価値を評価できる「ヒト」造りを始める社会なのです。

これに気付いた日本人の一人が西郷隆盛です。『西郷南洲遺訓』は、隆盛が「生きた学問(生学問)」を重視したことを伝えています。すなわち、隆盛は「此(これ)からは、武術許(ばかり)では行けぬ、學問が必要だ。(しかも)學問は生きた學問でなくてはならぬ」と述べて、1869(明治2)年、5人の有能な若者を、「知行合一」を説く陽明学者の春日潜庵の下に遊学させます。隆盛は、『遺訓』の中で「聖賢の書を空しく讀むのみならば、譬へば人の劍術を傍觀するも同じにて、少しも自分に得心出來ず。自分に得心出來ずば、萬一立ち合へと申

されし時逃るより外有る間敷也」と語っています。すなわち、劍術においては武士が他人の鍛錬を側で見ているだけでは、自分自身得心もいかず修得もできない。それでは万が一、いざ真劍勝負の立ち合いとなった時、逃げるしかないであろう。劍術と同様、学問も高い「志」を持たずに空しく読書をし、皮相的に学ぶのであれば、自分自身が納得できず、肝心な意思決定の時に学んだはずの知識は役に立たず、「知識戦略」無き意思決定(「知識」と「行動」の不整合)に流れてしまう、と。こう考えますと、小誌前号で私が申し上げた「知的サムライ集団」は、隆盛によって明治2年から既に提唱されている訳であります。

「知的サムライ集団」構想を示した隆盛ですが、皆様ご承知の通り、それから10年も経たないうちに、隆盛は1877(明治10)年、隆盛を慕う武士達による軽挙妄動に巻き込まれ、西南戦争で自らの命を失います。歴史に関して素人の私ですが、明治2年に潜庵に学んだ隆盛の「知的サムライ集団」一期生5人はその時如何なる心境であつただろう、と独りで溜息をついております。確かに、人の命を奪う刀を持つ武士は、「知」と「情」とのバランスを保ちつつ行動してもらわなくては、周囲の人々は恐ろしくてたまりません。幕末・維新時、すなわち、未だ多くの武士が「知識」の重要性を十分認識しないまま刀を振り回していた頃、天誅の名の下に多くの優れた「知的サムライ」が命を奪われました。奇しくも隆盛が潜庵に有能な若人を託した明治2年、当時の戦略家の一人、横井小楠は、「愚かなサムライ集団」に暗殺されてしまいます。ご承知の通り、小楠は、アヘン戦争後、清朝中国の大学者である魏源が中国流の強兵策(夷の長技を師とし以て夷を制す/師夷長技以制夷)を提唱して著した『海國圖誌』等を学び、富国・強兵・士道の三論を説く『国是三論』を著した優れた戦略家でありました。優れた「知識」を具えるが故に、「無知なサムライ集団」に誤解され、妬まれ、疎まれた小楠の最期と、小楠を欠いた明治日本を考えますと、深い溜

息だけが出てきます。不幸にも、世界情勢に暗く、自らを正しいと盲目的に思い込んだ「サムライ集団」の残党はその後も日本のなかに生き続け、皆様ご承知の通り、「5.15 事件」、「2.26 事件」を代表とする悲劇が昭和日本を襲います。*The Cambridge Gazette* の一昨年 6 月号で紹介した吉田茂首相の名著『日本を決定した百年』の中に、1930 年代、疲弊した日本経済社会における昭和の「サムライ集団」の一部を評した次の文章があります—「彼らは … 手段のいかに問わず、この窮状を解決しなければならないと考えたように思われる。彼らは使命感にあふれていたが、しかし、世界の状況には暗かった」、と。吉田首相は、純情ではあるが「無知なサムライ集団」に対して動機には同情を示したものの、彼等の「知識戦略」無き意思決定(「知識」と「行動」の不整合)には厳しい判断を下しています。

グローバル時代の「知行合一」

こうした過去の苦い経験を経て、平成の「知的サムライ集団」は、「行動」を「知識」が制御する「知行合一」の精神を秘めた集団であるべきだと考えます。そして①「生きた学問」の精神、即ち、目的・正確性・タイミングを重視し、実践的な学問を通じて、情報・知識の価値観を養うこと、②グローバルな視点を忘れないこと、③グローバルな現実世界は、時々刻々と変化することを認識すること、④知識を実践的かつ最新の状態に保つ方法は reality check と update であること、⑤reality check と update を行うには、個人的努力では限りがあり、「ヒト」と「ヒト」との、情報のキャッチボールが国際的に不可欠であること、⑥常に「知識」が実践的で最新であるためには、「ヒトの和と輪」を通じて、直接的・継続的・多層的で双方向の国際的な知的対話が重要であること、以上を考える必要があります。

平和な平成日本でご活躍をされている若人の皆様、「『生きた学問』が重要だとは至極当然!」と思われるかも知れません。確かにそ

の通りです。「贅沢は敵だ!」と叫んだ経験の有る昭和日本と、「贅沢は素敵だ!」が常識となった平成日本では確かに多くの点で違いがあり、「生きた学問」は当たり前になっているかも知れません。しかし、歴史が示す通り、学問は往々にして①「後ろ向き」で過去の分析や礼賛のみに集中し、また②「形式的」で、建前論だけに終始する危険性に陥ります。班固等が著した『漢書』の有名な言葉に、(a)「俗儒は時宜(ジギ)に達せず、好みて古(いにしえ)を是とし、今を非とす/俗儒不達時宜、好是古非今 (二流の学者はタイミングに合わせて戦略を考えず、いつも昔の戦略を高く評価し、現在の戦略を非難する)」、また(b)現代中国の毛沢東思想、更には鄧小平提唱による「改革・開放政策(改革开放)」の際にも引用された「實事求是/实事求是 (事実に基づいて考えを進めるべき)」が有ります。こう考えますと、隆盛が重視した「生きた学問」は、注意を怠ると、「後ろ向き」、「形式的」な「知識」を求める「死んだ学問」に墮落する危険性があります。「死んだ学問」を学んだ人間は、目的・正確性・タイミングという基準から優れた情報・知識が舞い込んで来てもその価値に気付きません。若人の皆様、このことに十分留意して下さいようお願い致します。

私は昨年秋から関西学院大学(関学)で、グローバルな視点から日米中 3 カ国の産業構造の変化に関して、学生さん達と一緒に学んでいます。これは本校出身で昨年末に国連開発計画(UNDP)の駐日代表に就任された村田俊一関学教授とのご縁で始まったものです。日本の学生さん達と久しぶりに知的対話を始めた私ですが、彼等の熱心さには感銘を受けました。また彼等の質問は鋭く、私がハッとする視点もあって、教える立場の私が学生さんから学ぶ機会を頂いております。ハーバード大学では、中韓両国出身の友人と互いに学び合うたびに、日中韓 3 カ国で共通となっている王陽明の有名な言葉「教学は相い長ず/教學(コウガク)は相い長ず/教學相長/호학상장(人に教えることと、人から学ぶことは相互に

助け合う、の意)」を仲間同士で繰り返しております。それが今、関学での経験を通じて、互いに学び合うという点は、世界共通だと感じている次第です。学生さん達との知的対話の話を、中国社会科学院(CASS)でマクロ経済政策を研究し、王洛林前副院長からも深い信任を受けている李涛氏に話しましたところ、結局、知的対話の質の高さは、「ヒトの和と輪」次第だと2人で深く納得した次第です。学生さん達と特に議論したのが、内外の視点の違いです。日本が抱く世界観とそれに基づく日本の「自己イメージ」が、海外諸国が抱いている日本の「イメージ」と大きく乖離している点について議論しました。勿論、どちらが正しいかという話ではありませんが、この乖離をどう評価し、どの方向に変えてゆくべきかを今後考えてゆきたいと思えます。

関学での私のクラスの目的を簡単に申し上げますと次の通りです—グローバル化と高度情報化が進展するなか、国、企業、個人の行動様式が大きく変化してそれが国全体の産業構造、更には経済構造の変化として現れて来ています。以上のことを考えるため、最新の専門文献を言及しながら、すなわち、世界の一流の研究者は何を考えているのかを垣間見ながら、ひとつの「世界観」を平易に解説することが私の役割だと考えております。授業で使用する資料は、全米経済研究所(NBER)や経済協力開発機構(OECD)等の論文、『フォーリン・アフェアーズ』誌や『フォーリン・ポリシー』誌の論文、そして国連貿易開発会議(UNCTAD)の報告書等に基づき、私が作成したパワー・ポイントを使用しております。教材の中で使用する言語は学術的に国際共通語である英語ですが、学生さん達は真剣に学んで下さり、大変嬉しく思っています。ただし、講義と質疑応答で使用する言語は、身の程知らずではありますが美しい日本語を心がけており、意味の無い形での英語は使用しないように努めています。また、シラバスという授業計画用資料を、カリフォルニア大学バークレー校のステイーヴン・ヴォーゲル教授にお

見せしたところ、私を元気づけるためか、同教授は心優しい思いやりと多分のお世辞をこめて褒めて下さいました。今後、ボストンへの帰路にサンフランシスコに立ち寄り、彼のクラスで話して欲しいと言われて、「おだて」に大変弱い単純思考の私は喜んでおります。

脱線話で恐縮ですが、昨年12月、関西でホテル住まいをしている時、『忠臣蔵』を久しぶりにテレビで観ました。綿密な情報収集や偽装工作等、周到な準備をして、1703年1月(元禄15年12月)、討ち入りを果たす大石内蔵助の計画立案及び実行能力とリーダーシップ、そして赤穂浪士の「ヒトの和と輪」には改めて感心させられます。が、ご存知の通り、維新時の大啓蒙家、福澤諭吉先生は、『学問のすゝめ』の中で義士の行為に対して厳しいご判断をされています—素晴らしい原文の代わりに、私なりの拙い要約を載せますと、「赤穂浪士は、不満があるなら法律に従って江戸幕府に訴え出るべきだった。確かに幕府自体には問題があるから、最初に訴えた浪士は相手にされず、不当に殺されるだろうが、47人がまたひとり、またひとりと訴え続ければ良かった。そうすればさすがの幕府も吉良家を罰するであろう」と仰り、「しかし、赤穂浪士は、法治国家であることの理を忘れ、国民の身分でありながら、法律の重要性を考慮せず、軽挙妄動で上野介を殺したのは、国民の職分を誤り、国家権力の領域を犯して、勝手に吉良の罪を死刑と決めた」、と。福澤先生の筋の通った話には思わず頷いてしまいます。

私が赤穂浪士側を弁護するのも変な話ではありますが、もし義士に対し、法治国家、国民の身分と権利、政府の権力といった概念をしっかりと理解させ、吉良暗殺という軽挙妄動を慎めと諭すのであるならば、江戸幕府を含めた日本全体が、法治国家のあり方について広い視野の議論を持つべきだったと思っています。すなわち、討ち入りの1703年の前に、せめて1690年に英国の哲学者ジョン・ロックが著した『統治論二篇(The Two Treatises

of Government)』だけでも、荻生徂徠や室鳩巢をはじめとする賢者に読んで頂き、国家と国民との関係を改めて議論して頂きたかったと思っています。天下泰平の元禄時代、政府=国民の関係を海外での議論も横目で睨みつつ、国内で冷静な議論を十分していれば、福澤先生のご意見も、内蔵助の心のどこかに浮かんだのではないかと勝手な想像をしている次第です。そして今は、敬愛する良寛先生の言葉をまとめた『良寛道人遺稿』の中の「生を捨てて義を取る古(いにしえ)すら尚お少し、況(いわん)や又四十有七人をや。一片の忠心、転ず可からず、人をして永く元禄の春を思わしむ」を口ずさんでいます。良寛先生が仰った通り、エリートとしての武士のなかにはその地位に安住し、一部には不埒な輩もいて、武士道を守り、一般民衆から「さすがは…」と尊敬された「真のサムライ」の数は極めて限られていました。だからこそ赤穂浪士の潔い行為は人々の心に永く残ったのでしょう。

脱線の脱線で恐縮ですが、鎖国下の日本であつても以外と早い時期に赤穂浪士の討ち入りは世界に伝えられています。オランダ商館長(甲比丹/カピタン)フェルディナント・デ・フロートは、年に1度の江戸報告(江戸参府)の際に利用する宿が赤穂浪士にも縁があったことから、元禄16年には打ち入りを知り、それを海外にしかも好意的に伝えたそうです。同じく商館長のイザアク・ティチングは、1822年、『日本風俗図誌(The Illustrations of Japan)』を英仏両言語で出版し、討ち入りを紹介します。明治に入ると、ボストン大学ロー・スクールに留学した明治の官僚、斎藤修一郎と英国の元外交官で米国の実業家であるエドワード・グリーが「仮名手本忠臣蔵」に基づき為永春水が描いた『いろは文庫』を翻訳し、1880年、『The Loyal Ronins: An Historical Romance』としてニューヨークから出版しております。日露戦争時、大読書家のセオドア・ルーズベルト大統領が『The Loyal Ronins』を読み、「赤穂義士」に感激した話は幾つかの資料で紹介されています。同大統領は、『緑の館(Green

Mansions)』で有名なウィリアム・ハドソンの小説(The Purple Land)では序文を書く程の読書家で、『The Gazette』昨年5月号でも触れた通り、新渡戸稲造博士の『武士道(Bushido, The Soul of Japan)』を30部購入して、家族、親戚、そして有力な米国連邦議員等に配布した上に、柔道まで習った「日本通」ですから、『The Loyal Ronins』も皆に配って下さったかも知れません。

さて、テルアヴィヴに向けて成田空港を出発する前夜、公安調査庁の荒井崇氏が幹事役を務めて下さったお蔭で、東京大学の高原明生教授、法務省の高橋邦夫東京入国管理局長、そして東京新聞の清水美和編集委員と一緒に、銀座でグラス片手に、中国情勢等の情報交換をしました。ご堪能な中国語に感銘を受けて以来、私が尊敬する清水氏は皆様ご承知の通り、中国問題に関して日本を代表するジャーナリストの一人です。お目にかかった時、清水氏からサイン入りのご著書『「人民中国」の終焉』を頂きましたが、ボストンのローガン国際空港に到着するまで、私は夢中になって同書を読んだ次第です。同書の「あとがき」で、清水氏はCASS日本研究所の金熙徳研究員の発言に言及し、「日本の中国論議は十年前の中国を頭に浮かべて語られており、専門家の中国認識もせいぜい一年前の中国であり、現実は大大きく変わっている」と述べておられます。この文章を読んだ時、私は日本語がご堪能な在日米国商工会議所(ACCJ)会頭のチャールズ・レイク氏の言葉を思い出していました—ネット上に掲載された日本経済新聞の清水真人編集委員による記事によると、昨年、東京で開催された或る会合でレイク氏は、「グローバル化時代、技術革新の加速が競争力を支える。そのことに本当に(日本は)気が付いているのか」という旨の発言をされています。皆様、CASSの金氏とACCJのレイク氏、両氏のご意見を厳密に吟味するかどうかは別として、このお二方のご指摘通り、日本の外ではグローバル化が急速に進展し、状況が刻々と変化していることは真実だと思います。そしてその変化の速さは、私達の想像を

遙かに超えていると思っています。

従って、グローバルな視点から状況判断を下して行動するための情報・知識は、間断無く更新しない限り、急速に陳腐化し、現実を反映しない不正確なものになってしまいます。すなわち、情報・知識は「現実世界で常にチェックする(reality check と update)」必要に迫られている訳です。勿論、小誌で時折触れていますように和漢洋の古典が教える普遍的な情報・知識は存在します。しかし現実世界を広く見渡せば状況は刻々と変化しています。また状況変化に伴い、「ヒト」或いは組織の目的も当然変化します。こうして、目的・正確性・タイミングに合わせる形で私達の知識を常に維持・向上させるには、実践を通じて既存の知識を検証(reality check)し、その検証過程で得られた新たな情報と既存の知識を付き合わせる必要に迫られる、換言すれば、知識の新陳代謝を高めることが常に要求される訳です。こう考えますとグローバル化はあたかも私達に休む暇を与えず、私達を慌しい状況に追い込む「かのように」映る訳です。その結果、一部の人々が、「反グローバル」の誘惑を感じ、逃避的・鎖国的な行動に流れることも或る意味で頷ける訳です。しかし、グローバル化は、現実問題として残念ながら私達だけの「意思」だけでは止まりません。また 1933 年のように「連盟よさらば」とばかりに、日本が再び鎖国状態に突入すれば、現在の北朝鮮と同じ運命を辿ることは明白です。そして今、グローバル化は極超大国である米国や台頭する中国であっても阻止することは難しい段階になっています。勿論、米国や欧州等の主要国、或いは世界中が一致団結してブロック化する「意思」を持てば容易に「反グローバル」な世界を形成できるでしょう。が、その蓋然性は極めて低いと言えましょう。こうして好むと好まざるとにかかわらず、また良かれ悪しかれ深化するグローバル化のなかで私達は生きてゆかざるを得ません。では、グローバル化のなかで如何なる「知識戦略」を採るべきでしょうか。当然、私達個々人が

単独でも reality check と update について努力する必要があります。しかし、様々な専門分野が絡み合うだけに、一個人の努力では、時間的に不十分かつ不可能なのは明白です。従って「ヒトの和と輪」が無ければ、優れた「知識戦略」の構築は不完全なものになります。こうして、人的・時間的・経済的な資源が制約されたなかで生きる私達が、常に役立つ最新の「知識」を持つには個人と共に組織的な工夫が必要です。個人的工夫とは、小誌創刊号と昨年 7 月号で申し上げた通り、微笑みとジョークを忘れずに皆様が、高い「志」と優れた才能を秘めた皆様以外の「ヒト」を相手に、質の高い情報交換をするための 5 つの資質—(1)一流の専門知識、(2)幅広い一般教養、(3)語学力、(4)マナーと交際術、(5)多角的・重層的な協力・相互補助の精神—を高めることです。そうすれば皆様ご自身が、質の高い情報・知識の「目利き」となり、耐えざる reality check と update を通じて、「誰」が「如何なる分野」で優れた「ヒト」であるかを容易に見抜くことができ、同時に相手側も皆様が質の高い知的対話の相手として認め、情報のキャッチボールの相手役をしてくれるでしょう。また組織的工夫は、小誌昨年 7 月号で申し上げた「ヒトの和と輪」を通じ、「志」を共有できる「ヒト」の集団を形成し、その集団のリーダーが、全体の目的を明確にし、それに適した「知識戦略」を練り上げることだと私は考えます。こうした「ヒトの和と輪」の世界では、直接的・継続的・多層的で双方向の知的対話が行われ、自然と reality check と update がなされるようになりましょう。

再び脱線で恐縮ですが、ホテルで、NHK のテレビ番組『その時歴史が動いた』「真珠湾への道」を観ました。これは真珠湾攻撃の立案者で悲劇の提督山本五十六—国際関係に明るく、彼我の国力の差を知り、三国同盟と日米開戦に反対した帝国海軍軍人—を描いたものです。番組では触れられませんでした。山本元帥は、1930 年のロンドン軍縮会議の際には、強硬な条約反対派で若槻禮次郎首席全権

を困らせたそうです。が、1934年、第2次ロンドン条約の予備交渉に海軍首席代表として臨んだ時には、激変した国際環境に気付いて、条約派に転じています。その後、山本元帥は、国際関係に暗い海軍の多数派や、暗殺まで考える対米強硬派に追い詰められてゆき、1939年、連合艦隊司令長官に任命されます。そして真珠湾攻撃では多大なる戦果を挙げましたが、戦略的な大失敗を犯しました。内外における戦後の歴史家は冷静な判断を下せますので、冷淡な批評をしております。が、ここハーバード大学を含む在米経験を基に米国の底力を体感した山本長官の心中を考えますと、長官の孤独な努力の限界を感じずにはられません。これに関して小誌昨年10月号で触れた知将高木惣吉は、日露戦争時に東郷長官が置かれた環境と比較しています—「対米戦争は無理だと強調する山本大将と、敵は優勢でもわれに勝算ありと確信して出征した東郷大将とではスタートがまったく違う。一方はこの無理な戦いで、一発のホームランに逆転の勝負を賭けざるをえなくなり、他方はいかに堅実に個々の敵を撃破しようかという合理的戦略の差が出るのは当然の話で、また開戦反対の山本大将が総長とか、海相ならおそらく好戦派以外、国民の多くは納得できなかったのだろうか。また東郷大将は心から信頼のできる島村、加藤、秋山ら第一流のスタッフを持つことができたが、山本大将は人事局のおしきせのスタッフをあてがわれ、一流と思われるのは末席の参謀たちで重大計画に対する発言は難しい立場であった。また大事な機動部隊長官も参謀長も、いつも山本大将の大胆な計画に不安やるかたなく、および腰で戦場に向っていくという有様であり、士官名簿の順位と、経歴本意で動脈硬化した海軍人事は病膏盲だったといえよう。米内連合艦隊長官、山本機動部隊長官もよし、山本総長、小沢連合艦隊長官、山口機動部隊長官というような夢がもし実現していたら、もし負けたとしてもそれは後味のよい負け戦だったろうと思える」、と。さて、12月24日、聖地エルサレムの史跡を訪れた時、私のガイドはかくし

やくとした70歳代の老人で、1967年の第3次中東戦争時に戦車隊の一員として参戦したイスラエル軍の元将校でした。2人で歩いている時、山本提督のことも本で読んだという彼は私にこう聞きました—「真珠湾攻撃の時、日本では国際派は少数派だったそうですが、今はどうですか」、と。私はどう答えようかと思案した結果、話題を小説『ダ・ヴィンチ・コード』に変えてしまいました。そして今、有能な皆様と共に、グローバルな視点から日本を再点検してみたいと考えています。

4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」2月号の本文は以上です。皆様ご承知の通り、昨秋、東京大学名誉教授の木村尚三郎先生が亡くなりました。暖かいお人柄の先生は、心に染み入る文章をお書きになる方でした。その優しい先生が、30年前の1977年、当時の日本に関し、毅然たる文章を『西欧の顔、日本の心』の中に残されていますので、最後に皆様と共に、先生の微笑みを思い浮かべながら考えてみたいと思います—「現代日本人の最大の欠点は、非国際人、非海洋民族の最たる者でありながら、それに向いて気付こうとせず、海外に対しては頭部のうち、目と耳を動かすのみで、口は利かず、鼻は利かせず手と足はさっぱり動かそうとしない点である。居ながらにして世界を視聴し、それで分かった気になってしまっている精神的な怠惰、傲慢さ、ないし、臆病さこそ、何よりもまず打ち破られねばならないものであろう」、と。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com